筑紫女学園大学リポジト

8. A Note on Abokyu no fu (Poem of Abokyu Palace)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松崎, 治之, MATSUZAKI, Haruyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/706

その点、「阿房宮賦」には、為政者たるものは、人民を愛することが肝要という思想や心情が明確に表出している。したがって、杜牧の文学は、貴族的高踏的なものから、理解しやすい普遍的なものへ移行して行くという中国文学のもつ伝統的な傾向にも符合（ふごう）するものと、把握している。

平成十三年十月十三日・脱稿

参考資料

1、『阿房宮賦』については、「新釈漢文大系」16（明治書院）星川清孝著の『古文真宝後集』巻之一・賦類中のものと、同じく「新釈漢文大系」18（明治書院）前野直彬著の『文章軌範』正篇下・巻之七・乎字集・小心文のものを参照し引用した。

2、『過秦論』については、「新釈漢文大系」57（明治書院）猪口篤志著の『續文章軌範』巻之五・自字集・小心文の「過秦論」中・下のものを参照し引用した。

3、王延寿の『魯靈光殿并序』の并序については、「新釈漢文大系」81（明治書院）高橋忠彦著の『文選』（賦篇）下の「宮殿」篇のものを、参照し、引用した。

4、秦の始皇帝については、「中国古典文学大系」10（平凡社）野口定男・近藤光男・頼惟勤・吉田光邦訳の『史記』秦始皇本紀第六のものを参照した。

5、賦や司馬相如については、「中国古典文学大系」12（平凡社）、野口定男訳の『史記』下・司馬相如列伝第五十七と、小竹武夫訳の『漢書』中巻列伝Ⅰ（筑摩書房）の「司馬相如伝」第二十七・上・下のものを参照した。

そして司馬相如（前一七九－前一一七年）によって確立された〝漢賦〟は、こうした傾向の発展変化に終始したので、屈原の精神は、ここに至って失われたといわれる。

こうした文学史の流れの中で、賦が六朝以後、次第に衰えていったというのが通説であるが、結局、文字の遊戯に墮する傾向が顕著で、形式や音律の美はあっても、それは表面的なものであって、形式に対して内容が伴わず貧弱化していったということであろうか。

あるいは、深く人間性に食い入っていこうとする努力が希薄で、ただ、さまざまな事象を羅列するにすぎないもので、人々の琴線に触れるものがなかった。いいかえれば、貴族趣味的なもので民衆的ではなく、一般の人には理解しがたいものになっていったということである。

思うに、〝賦〟が他の詩文に比して最も早く古典となって衰微していったということも、以上の経緯を考えた場合、当然であったかもしれない。

してみると、戦国時代の屈原から、約一〇〇〇年ののち、晩唐の杜牧が賦の文学を、訴えるべき志をもっていた屈原のように、「阿房宮賦」を媒体として、蘇らせた感があるのではあるまいか。

勿論、晩唐という時代による精神的必然性が執筆の前提として存在するが、一面、六朝以来の美文（四六駢儷体等）の弊害に対する改革が、前代（中唐期）に古文復興運動として、展開された刺激もあってか、形式美と達意の文をほどよく発揮することで、本来の賦として結晶したものと捉えたい。

畢竟するに、屈原的な賦の文学の要素も、そなえたうえで、全体として無駄のない洗練された文体であるということと、何といっても理解しやすい達意の文であることが、人々の共感を産んでいったものと思われる。

志や思想が文字を駆使すべきであるにもかかわらず、ともすれば、文字が、志や思想を駆使しがちになる。賦の弊はここにあったように感じられる。

しんだ詩句が、それを物語っている。それは、こうである。

勝敗兵家事不期、　勝敗ハ兵家モ事期セズ
包羞忍恥是男兒　羞ヲ包ミ恥ヲ忍ブハ是レ男児
江東子弟多才俊　江東ノ子弟才俊多シ
卷土重來未可知　卷土重来未ダ知ル可カラズ

○敗北という恥をしのび、肩身のせまい思いに耐えて再起を計ってこそ、真の男だ。……江東ですぐれた若者たちと、力をあわせて、地面をまきあげるような勢いで、再び攻めのぼってきたなら、結果はどうなっていたかわからないのにという杜牧の気持には、衰亡に瀕した唐帝国の再興への願望が、暗に重ねられているように見うけられる。

というのも、史実に対する、仮定の発想は、ナンセンスであることはわかっているが、芳しからぬ項羽の人間性を知りつくしたうえでの、この杜牧の仮説の発想を、考えるとき、これは、杜牧の胸に秘めた国家再興への、願望の象徴であると思われてならぬ。

四、

元来、戦国時代、楚の屈原（紀元前三四三－前二七七年）によって「離騒」が起草され、志（苦悶）が訴えられて以来、漢初賈誼（前二〇一？－前一六九年？）の作も、この意味からいって、屈原の正統をつぐ者であったろう。

ところが、枚乗（？－前一四〇年）・東方朔（前一五四－前九三年頃）に至って、宋玉的（前二九〇－前二二三年）な作風が台頭し、自分の心情を述べないで、傍観者的な立場から説くという傾向に推移していった。

つまり、作者の心を離れて技術に腐心するということになったのである。

えさせる感動的な作品であったことが明示されている。

しかも、呉武陵が侍郎（崔郾）に、杜牧を推薦する言辞は、並のものではなく、熱意がこもっていて、「このものは、王を補佐する才能のもちぬしです」と、いう称揚の言には、「阿房宮賦」の論述を媒体としての政治家杜牧に対する感動共鳴の気持に由来するものであろう。

また、『唐才子傳』では、杜牧は剛直奇節ありといい、同時に容姿美しく歌舞を好み、風流に傾倒して細行をかえりみなかったともいう。

そして往々事にふれては国家の大事を論じ、利害を指摘すること甚だ切実であった。

さらに、その詩は、豪放であり、甘美であり、放蕩であった。文においては論説・紀伝・墓誌銘等数多く、『孫子』に注釈もしていると。

○思うに、詩文の世界では、多方面に、その才能を発揮していることは確かである。

そして、杜牧の時代、唐帝国は完全に末期的症状を呈していたことも史的事実である。

さらにそうした社会の中で、彼も時流に投じて酒と女に溺れ、――「十年一覚揚州ノ夢、贏チ得タリ、青楼薄倖ノ名」（七絶・遣懐）などと、いう悔恨と愛惜の交錯した情感を吐露してもいる。

はたまた、一方では、国家の大事を論じたり、利害を指摘したりと、政治に対する強い関心を明示している。――その感情表出の最たるものが「阿房宮賦」であって、それは美文であるばかりでなく、晩唐に対する憂国・憂世の心情を彷彿させるものであった。

端的に言えば、明らかに衰亡へ向かっている時代、彼は国家再興への夢を放棄することはできなかったのである。

ちなみに、歴史に対する一つの見識を、「烏江亭ニ題ス」と、いう七絶の詩に、暗示し託しているのがその証しであろう。――それは史跡烏江亭を訪れた時に、漢楚戦で劉邦（高祖）に敗北した項羽の最後を偲び、その死を惜

のに対して、魏徴（五八〇－六四三年）が答えた言辞といわれているが、このことばどおり、秦は守成の方策をあやまって、わずか十五年で滅んだのを思う時、無量の感慨をおぼえる。

というのも、秦は孝公以来、百有余年の余光遺業のいしずえのもとに、七代目の始皇帝に至ってやっと念願の天下統一ができたのに、十五年で自滅したという史実は、守成の困難さを明示する典型的な例といわざるを得ない。

一方、賈誼の『過秦論』の趣旨をベースにして記載したと思われる杜牧と「阿房宮賦」にまつわるエピソードを『唐才子傳』にもとづいて、披露すると、こうである。

「杜牧（八〇三年－八五二年）、字は牧之。京兆の人で、善く文を屬った。太和二年（八二八）、韋籌が狀元のときの進士で、厲玄と同期であった。及第前、東都（洛陽）に試験を受けに行ったときのこと、ときの主司（知貢擧）は禮部侍郎の崔郾であったが、その崔郾のもとに、大學博士の呉武陵が駑馬に策うち面會にやって来て、『侍郎は峻い徳と偉なる人望によって、このたび明君のために俊才の選考にあたられることとなられたのですから、わたくしごときが、あれこれ口出しするつもりはありませんが、先だってたまたま十数人の文士が、眉をあげ掌を抵ち、一緒に一巻の文章を讀んでいるのに出会いました。覧るとそれは外ならぬ進士受験生杜牧の『阿房宮賦』でした。このものは王を補佐する才能のもちぬしです』と。そして杜牧の詩巻をとり出し、笏（手板）を搢み威儀を正してこれを朗誦した。郾が大いに称賛すると、『なにとぞ彼に狀頭（狀元・第一番）をお与え下さいますように』と、たのんだ。ところが、『それが、もう人を定めているのです』と、郾がいうと、それでは、『やむを得ません。では第五人（第五番）をお願いいたします。それもだめでしたら、どうか賦によって再試験をして下さい』と、辞をつくし容をつくしてたのんだので、郾は『諸生の中には、牧は疎曠で細行を謹しまないというものも少なくありませんが、敬しんで教示に従い、約束はきっとお守りしましょう」と、いった。

○実にユニークな対話であって、「阿房宮賦」が、書かれた当時、すでに文士たちにとって、この賦は充足感を覚

次に、民を治める道は、第一の努めは民心を安んずるにあるだけで、そうなれば天下に逆臣があっても、決してこれに饗応して助けるものはないのである。だから古来、「安堵の民は相与に義理を行うことが出来るが、危惧の民は与に非道をなし易い」と、いうのは、このことをいうのである。

結局、二世、胡亥は天子となりながら、殺されたのは、傾危を正す方法が間違っていたからであると、しめくくっている。

これに対して、方望溪は、「此レ前篇ノ『攻守勢ヲ異ニス』ヲ承ケテ、天下ヲ守ルノ道ハ民ヲ安ンズルニ在リ、始皇既ニ之ヲ前ニ失ヒ、二世又之ヲ後ニ失ヘルヲ言フナリ」と、言っているが、当を得た見識と思われる。

以上、『過秦論』の三箇所を引用して論述してきたが、賈誼の一貫した秦の滅亡の根源は、為政者（始皇帝・胡亥等）に、安民の心情が欠如していて、逆に、危惧心をつのらせていったことにあると強調している。

思うに、杜牧の「阿房宮賦」の結論も、前者、賈誼の論旨をうけて、為政者の人民に対する愛の欠如が、六国も秦も自滅させたのだという。

賈誼の論をもっと具現すると、――草創と守成とでは、政策は異なるはずだということ。そして、秦は守成の政策が誤っていたということである。そこには第一に必要不可欠な民心を安んずる政策がなかった。――実際、長い戦乱の果てに人民は皆危殆不安の情態にあった。

そして、そうした危惧の民は非道に加担しやすい心理であることに為政者は気づかず、その傾危を正す方法を間違えて、逆に傾危を刺激する刑戮を重んずる策を持続したのである。

したがって、滅ぶべくして、滅んでいったという賈誼の明快な秦滅亡論の内実である。

ここで想起されるのが、『貞観政要』（呉兢撰）の君道篇に見える「草創ハ易ク、守成ハ難シ」と、いう名言である。これは唐の二代目皇帝太宗（在位六二六－六四九年）が功臣に、「草創ト守成トイズレガ難キ」と、たずねた

ところが、秦王は貪欲と鄙劣（いやしいこと）な心で、功臣を信頼せず、士民を親愛せず、王者の道をすて、私権にのっとり、文書を焼いて講習することを禁じ、残酷な刑法を設け、仁義を後にし、暴虐を以て天下の頭目となった。

普通、「天下を兼并するには、詐力を上策とし、天下を安定するには、順当な権力を尊重する」と、いうが、これは攻むる（草創）のと、守る（守成）のでは、やり方が同じでないことをいったものである。

畢竟、秦は戦国の時代を統一して天下の王となったけれども、その道もかえず、其の政も改めなかった。これは天下を取る手段であって、国を守るのとは違う。したがって、全く孤独で天下を所有しているのだから、その滅亡がはやかったのは、これまた当然であったろうと、いう。

この篇末に、二世胡亥の過失を次のように描いている。

㈢「百姓（人民）窮困スレドモ、而モ主ハ収恤セズ。然ル後、奸僞竝ビ起リテ上下相遁レ、罪ヲ蒙ル者衆ク、刑戮道ニ相望ンデ、天下之ヲ苦シム。君卿ヨリ以下、衆庶ニ至ルマデ、人自危ノ心ヲ懐キ、親シク窮苦ノ實ニ處リ、咸其ノ位ニ安ンゼズ。故ニ動カシ易キナリ。是ヲ以テ陳勝、湯、武ノ賢ヲ用ヒズ、公候ノ尊ヲ藉ラズ、臂ヲ大澤ニ奮ヒ、而シテ天下ノ饗應セル者ハ、其ノ民危フカリケレバナリ。故ニ先王ハ始終ノ変ヲ見、存亡ノ機ヲ知ル。是ヲ以テ、牧民ノ道ハ努之ヲ安ンズルニ在ルノミ。天下逆行ノ臣有リト雖モ、必ズ饗應ノ助無カラン。故ニ曰ク、『安民トハ與ニ義ヲ行フ可クシテ、危民トハ與ニ非ヲ爲シ易シ』ト。此ノ謂ナリ。貴キハ天子ト爲リ、富ハ天下ヲ有チ、身、戮殺ヲ免レザリシ者ハ、傾ヲ正スコト非ナレバナリ。是レ二世（胡亥）ノ過ナリ」ト。

○このエピローグの論で、印象深い言辞は、――一夫陳勝は、殷の湯王、周の武王の賢を必要とせず、公侯の尊きを藉らず、大沢の中で奮起して起ちあがると、まるで天下が響きあうように応じたのは、人民がみな危殆不安の情態にあったからであるという。

と、思っている。

そこには外形の物理的な防備の強固さがあればそれで十分事足りるといった思わくはあっても、それを機能させる人及び人の心のありようの重要さに対する配慮はなかったかのようであった。

(二)「秦ハ区々ノ地ヲ以テ、萬乗ノ権ヲ致シ、八州ヲ招イテ同列ヲ朝セシムルコト百有餘年、然ル後六合ヲ以テ家ト爲シ、殽函ヲ宮ト爲ス。一夫難ヲ作シテ七廟墮タレ、身ハ人ノ手ニ死シ、天下ノ笑ト爲レル者ハ何ゾヤ。仁義ヲバ施サズシテ、攻守ノ勢異ナレバナリ。」

○『過秦論』の要点は、この篇末の「仁義ヲバ施サズ」の一句に言い尽くされているといわれている。――端的に言えば、その通りと思われる。

杜牧の「阿房宮賦」の結語では、秦も六国も、為政者が人民を愛さなかったから、自滅したのだといっているが、究極のところは、『過秦論』のこの「仁義ヲバ施サズ」のことで、仁政を行なわなかったということである。

賈誼は、一夫陳勝が乱をおこすと、たちまち祖先の七廟（みたまや）は破壊され、二世の胡亥は宦官の趙高に、三世の子嬰は項羽の手に殺され、天下の物笑いとなったのは何故かと、自問しながら、秦が仁義の政治をしないで、攻むると守ると、その勢いを異にしているからであると結論づけている。

この点について、林西仲は次のように言っている――「秦ハ力ヲ以テ攻メ、亦タ力ヲ以テ守ル。而シテ仁義（親愛の心と道理にかなうこと）ヲ施サズ。攻守ノ勢同ジカラザルヲ知ラズ。亡ヲ取ル所以ナリ」と、いっているが、全く宜なるかなである。

さて、『続文章軌範』巻之五・自字集・小心文では、前篇に続いて、戦国時代の多くの人民は、久しく統一国家がなくて、戦乱の中で生命の安全と平和なくらしを得たいと願っていたところに、秦が平定したので、秦の天子の命を仰がないものはなかったとある。

三、

『過秦論』とは、秦国の過ちを論じた文という意味である。

秦は、戦国時代（紀元前四七五－前二二一年）の六国（楚・斉・燕・韓・魏・趙）を滅ぼし、乱世を平定して天下を統一したものの、わずか三代（前二二一年－前二〇七年・始皇帝・胡亥・子嬰）の十五年で亡んでしまった。何故か。――それは秦の守成の政策に根本的なあやまりがあったからだと論ずる。

その経緯は、始皇帝の六代前の孝公（紀元前三六一－前三三八年）の頃から秦の国は次第に勢力を拡大させ、始皇帝に至って天下を統一したが、守成の方策をあやまったがために、一夫（陳勝・呉広）の反乱を契機として、亡んでしまったと、その興亡盛衰の跡を説明して、篇末に於て、「仁義ヲ施サズ、攻守ノ勢異ナレバナリ」と、秦の滅亡した理由を述べている。

『過秦論』の概要は、以上のようであるが、文中での主要な部分を具体的に引用すると、こうである。

㈠「始皇帝ハ先王ノ道ヲ廃シ、百家ノ言ヲ燔キ、以テ黔首（人民）ヲ愚ニス。名城ヲ隳リ、豪俊（すぐれた人物）ヲ殺シ、天下ノ兵ヲ収メテ、之ヲ咸陽（都）ニ聚メ、鋒鍉（刀のほこ先やじり）ヲ銷シテ、鑄テ以テ金人十二ヲ為リ、以テ天下ノ民ヲ弱クス。然ル後……良将勁弩、要害ノ処ヲ守リ、信臣精卒、利兵ヲ陳ネテ誰何ス。天下已ニ定マリ、始皇ノ心、自ラ以為ラク、関中ノ固メハ、金城千里ニシテ、子孫帝王タルハ、萬世ノ業ナリ」ト。

○始皇帝は王道を廃止、焚書をやり、愚民策を実施したとあるが、独裁者の鉄則である。また、ここには天下を平定したのちにも、攻め滅ぼすさいの論理が、持続していて、守成の方策がない。

そして始皇帝は、「関中の防備は、鉄の城壁が千里もつづいていて、子孫が代々帝王をつぐことは、万世不朽」

一方、『岳陽樓記』は、岳陽樓から見た明と暗の二つの風景を描き、その風景によって憂え悲しみ、また喜び楽しむという二つの心、あるいはさまざまに変化する心ということを受けて、さて、昔の仁者（善い為政者）は、どこにあっても何に対しても、憂えたり楽しんだりしなかったと述べてゆくが、あざやかな転回である。

そして仁者は、人民が心配する前に心配して、その対策を考え、人民が喜ぶのをみて初めて喜ぶ「先憂後楽」と、いう態度をとるのだと、いう。――この「先憂後楽」という雄大な精神に裏づけられた風景描写であるからこそ、この『岳陽樓記』は、深い感動を与えるものと思われる。

極言すると、この文は、単なる叙景文ではなく同時代（北宋）の人々（為政者）に対する一種の箴言（いましめの言葉）でもあったのだろう。

要するに、為政者の姿勢としては、「かくあるべし」という、范仲淹の強い主張が本文の指針であったと思われる。

以上の事実を踏まえて、勘案すると、杜牧の「阿房宮賦」の現実直視にもとづく、現実に対する指針と反省を含む史論は、次代の道学的な体臭を感じさせる為政者の琴線にふれて、その表現技巧が体得され、文賦や名文といわれる文章の表現様式の一つのパターンをうみだすことになったと考えられるが、その功績は大きい。

ここで「阿房宮賦」のいわんとする主旨や史論は、一体、何に起因するものかということが、気になるところであるが、これは杜牧のドグマ（独断の説）ではない。

それは前漢の賈誼（前二〇一？－前一六九年？）によって論述された。『過秦論』という論文が、その下地であることは明らかである。

それでは、次の三章で、その『過秦論』のどういった部分が、「阿房宮賦」の現実に対する指針とか反省とかのセオリーまでを産みだす契機になったのかを、具体的に提起し、論述することにしよう。

これも、杜牧という詩人の人間性と晩唐という時代性が相俟って、産みだされたユニークな賦であろうが、確かに、『古文真宝』（宋の黄堅の編。戦国末から宋に至るまでの詩文集。前集は詩、後集は文を集めてある）の題下の注に、「末ノ一段尤モ鑒戒ヲ含ム、之ヲ読メバ余味有リ」と、いい、またこの篇末の注では、「亦後人ヲシタ復タ後人ヲ哀シマシメン」の句を評して、「此ノ一句大イニ規戒（ただしいさめる）ヲ含ム。一賦ノ中ニテ、其ノ意思悠長、蓋シ終リ窮マルコト無ク、其ノ詠歌スベキ者ナリ」と、いっているが、宜なるかなである。

こうしたことを勘案すると、「阿房宮賦」は、一つの史論であり、現実直視の具体的な議論文である。しかも、従来の賦の様式にそった視覚的な対象物に対する称揚賛嘆のそれではなくて、『詩経』以来の諷諫の情が激越な口調で吐露されたところは、現実（晩唐）の人々（主に為政者）に対する警鐘とか反省をうながす目的で執筆されたものと思われてならぬ。

したがって、エピローグの議論と散文化は、それを象徴するもので、「文賦」の源といわれる所以も頷ける。

ちなみに、北宋・欧陽修ノ（一〇〇七－一〇七二年）の「秋聲賦」、「鳴蟬賦」、それに同じ北宋・范仲淹（九八九－一〇五二年）の「岳陽樓記」等は、さしずめ、この「阿房宮賦」の影響、感化のもとに発展的に創作されたものであろう。

さて、欧陽修にしても、范仲淹にしても、北宋の代表的な政治家である。

欧陽修は、宋代の賦の特徴ともいうべき散文的な〝文賦〟のスタイルを確立したともいわれている。そしてそこに見られる特色は、慨嘆の情である。

具現すると、『秋聲賦』は、秋風の物さびしい音を形容し、秋には万物が凋落することを悲しみ、そうした自然現象の変化、推移のきびしさと、人間の生活との関係を述べて、終りに人生のうつろいやすいことを慨嘆したものである。

賦は、普通・漢代以後さかんになった韻文の一種で、諷諫（それとなく遠まわしにいさめる）の意を含んだ文学といわれる。

その諷諫の意をもつ中国文学の特性について、司馬遷は『史記』の司馬相如列伝第五十七の太史公曰くで次の様に述べている。

『『春秋』は、現われた事実から推しはかって、隠微な意義に至り、『易経』は、道の隠微な意義にもとづいて人生の明白な事実にいたり、『詩経』の大雅篇は、王公・大人の徳を詠じてその徳が万民に及ぶことを述べ、小雅篇は、卑小な人物のおこないの得失をそしって、それが上の政治に根ざすことを述べている。言うところの外観は異なるが、徳に帰する点では同一である。

相如（前一七九－前一一七年・前漢の文人。賦にすぐれ、武帝に愛された。「子虚賦」・「上林賦」等が有名）には、空虚な言辞や濫らな説が多いが、しかし、その要は節倹（物事をほどほどにして、しまりがある）に帰するのであって、『詩経』の諷諫となんら異なるところはない」と。

ところが、前漢末の学者揚雄（前五三－一八年）は、『漢書』司馬相如列伝第二十七、の「賛に言う」の中で、先の『史記』の太史公曰くの引用のあとの部分を承けて、――「相如のつくつた奢侈・華麗の賦は、百の奢侈を勧めて一の節倹を諷諫したもので、鄭・衛の淫靡な音楽をさんざん奏して、曲が終わってから正しい雅楽を奏するのと同じであって、もともと諷諫の本旨を欠いている」と、批難の文を挿入しているが、この評は、『漢書』の賛であるので、恐らく後人が付記したものであろう。

いずれにしても、漢代、三国、六朝に至る賦系の文学にも諷諫の意は含まれていたものの、隠微（かすかなもの）なものであって、なかでも、建造物に対する賦は、おおむね賛頌のものであった。ところが、この「阿房宮の賦」の、六段・七段に見える要旨は、諷諫そのものである。

亦使後人而復哀後人也。　　亦タ後人ヲシテ復タ後人ヲ哀シマシメン。

（秦・人・君・人が押韻）

六国を亡ぼしたのは、六国自身であって、秦ではない。秦の一族を亡ぼしたのは、秦自身である。天下の人々ではない。もし六国の君主が、それぞれに自国の人民を愛していたならば、秦の攻撃など十分に防ぎ得たであろう。秦も滅亡後の六国の人民をわが民として愛していたならば、三世から順々に、万世に至るまで君主たることができたであろう。その一族を亡ぼすことなど、誰ができたであろうか。――秦の民は、自分で亡国を悲しむ余裕はなかった。後の世の人々が、秦の亡国を哀れんでいるのである。だがしかし、その後の世の人が、秦の滅亡を哀れと思いながら、それを手本として、みずからを反省することがなければ、さらに後世の人が、その人を哀れと思うような事態になってしまうであろう。

○このエピローグの段は、全体の調子が極端に散文的となり、杜牧の詠嘆と憤慨の情までが迸っている感があるが、論旨は明快である。

一・二・三段までは、阿房宮のさまざまな形態の偉容さの描写であるが、四・五段になると、批判の展開へと推移し、六段の後半において、「天下ノ人ヲシテ、敢テ言ヒテ敢テ怒ラザラシム。獨夫（始皇帝）ノ心ハ、日ニ益々驕固ナリ。……」と、秦が亡びる動機を指摘し、七段では国が亡びるのはどのような契機と経緯によるものかという議論になっている。

なかんずく、最後の「後人之ヲ哀シミテ、之ヲ鑑ミザレバ、亦タ後人ヲシテ復タ後人ヲ哀シマシメン」と。――これが杜牧としては、当世（晩唐）の人々に訴えたかったものである。

とにかく、「後人之ヲ哀シミテ、之ヲ鑑ミザレバ」と、いう後人は、杜牧たち晩唐の人々、つきつめれば杜牧自身でもある。いわば晩唐という時代と自己に対する警鐘と反省をうながす警句と思われる。

ここには、明らかに、そんな宮殿をどうして作ったのかと、抗議している感じがある。

そのうえ天下の人々に、不平不満をいわせず、始皇帝は日ましに、わがままで、頑固な独裁者となったので、民衆の心が秦をはなれ、さしもの帝国も崩壊したのだと説明している。

ここで始皇帝のことを〝獨夫〟といっているが、これは『書経』の泰誓下篇に、周の武王が殷の紂王を「獨夫受（受は紂の名）」と、呼んでいるのにもとづくものである。――そしてそれは、紂王は暴虐で、民心は離反しているから、天下の王であっても、実際はただ一人の孤立した男にすぎないと、紂王を罵倒した言葉であると、いう。――ここでは、始皇帝もそれと同様だといった杜牧の罵倒の気持がある。

してみると、この(五)、(六)段は、漢代以来の建造物に対する礼賛の賦とは、全く異質で、むしろ独夫始皇帝に対する杜牧の批難のメッセージということになる。

(七)嗚呼、滅六國者、六國也。
非秦也。族秦者、秦也。
非天下也。嗟夫、使六國
各愛其人、則足以拒秦。
秦復愛六國之人、
則遞三世、可至萬世而爲君。
誰得而族滅也。
秦人不暇自哀、
而後人哀之。
後人哀之而不鑑之、

嗚呼、六國ヲ滅ス者ハ、六國ナリ。
秦ニ非ザルナリ。秦ヲ族スル者ハ、秦ナリ。
天下ニ非ザルナリ。嗟夫、六國ヲシテ
各々其ノ人ヲ愛セシムレバ、則チ秦ヲ拒グニ足ラン。
秦モ復タ六國ノ人ヲ愛スレバ、
則チ三世ヨリ遞ニシテ、萬世ニ至リテ君タル可シ。
誰カ得テ族滅センヤ。
秦人ハ自ラ哀シムニ暇アラズシテ、
後人之ヲ哀シム。
後人之ヲ哀シミテ、之ヲ鑑ミザレバ、

架梁之椽、多於機上之工女、
釘頭磷磷、多於在庾之粟粒、
瓦縫參差、多於周身之帛縷、
直欄横檻、多於九土之城郭、
管絃嘔啞、多於市人之言語
使天下之人、不敢言而敢怒。
獨夫之心、日益驕固。
戍卒叫、函谷擧、
楚人一炬、可憐焦土。

梁ニ架クル椽ヲシテ、機上ノ工女ヨリ多ク、
釘頭ノ磷磷タルハ、庾ニ在ルノ粟粒ヨリ多ク、
瓦縫ノ参差タルハ、周身ノ帛縷ヨリ多ク、
直欄横檻ハ、九土ノ城郭ヨリ多ク
管絃ノ嘔啞タルハ、市人ノ言語ヨリ多カラシム。
天下ノ人ヲシテ、敢テ言ヒテ敢テ怒ラザリシム。
獨夫ノ心ハ、日ニ益々驕固ナリ。
戍卒叫ビ、函谷擧リ、
楚人ノ一炬ニ憐レム可シ焦土タリ。

（夫・女・縷・語・怒・固・挙・土が押韻）

阿房宮の棟木を支えている柱の数は、南の畑で働く農夫よりも多く、椽の数は、機で働く女工の数よりも多く、釘の数は、倉の穀物の粒よりも多く、瓦のつなぎ目は入りみだれて、その数は身にまとう絹糸よりも多く、欄干の数は、全国の城廓よりも多く、楽器の響きは、町の人々の話しあう音よりも多い。（そんな宮殿をどうして作ったのか。）

そして天下の人々に、この暴虐に対する不平を口に出すこともさせず、腹を立てることもさせなかった。

こうして始皇帝の気持は、日ましにわがままに、頑固になっていったが、やがて、兵士たちが雄叫びをあげ、函谷関の守りが破られて、楚人（項羽）の一本の炬火に、あわれ阿房宮のすべては焼け跡となってしまった。

○この段は、阿房宮に使用されている棟木、椽、釘等の数を農民や女工や穀物の粒等の数と比較して、それらより多いというが、これは正常な価値が転倒している実態を訴えているのである。

秦人視之、亦不甚惜。
嗟乎、一人之心、
千萬人之心也。
秦愛紛奢、人亦念其家。
奈何取之盡錙銖、
用之如泥沙。

秦人之ヲ視ルモ、亦タ甚ダシクハ惜シマズ。
嗟乎、一人ノ心ハ、
千萬人ノ心ナリ。
秦紛奢ヲ愛スレバ、人モ亦タ其ノ家ヲ念フ。
奈何ゾ之ヲ取ルコト錙銖ヲ盡シ、
之ヲ用フルコト泥沙ノ如クスル。

（營・英・山・間、石・礫・惜と三種の押韻。奢・家・沙も押韻）

燕、趙、韓、魏、斉、楚の六国が蓄えた宝物は、何代、何年にわたつて、たくわえられたものか。それを秦は掠奪して、山のように積みあげた。それも運べないとなると、鼎も鍋同然、宝石も石同然、黄金は土くれ、真珠は小石のように投げすてられた。そして秦の人々は、それを見ても、さほど惜しそうな顔もしなかった。ああ、天子の心は、人民千万人の心に影響をあたえるものである。秦王が贅沢浪費を好むと、人民も家をゆたかにしたいと心がけるようになる。では、何故わずかなものまで人民から取り尽くし、これを泥や砂のように惜しみなく浪費したのであろうか。

○前段までは、阿房宮の絢爛にして豪華な構造と、その中での華麗な生活とが描かれていたが、この段からは一転して批判である。

それは、諷諫（それとなくいさめること）どころではなく、批難である。宮殿も生活も、亡国のものを掠奪したものや、国民からしぼりあげて得られたものだという点から、批判は始まり、しかも、それを泥や砂のように惜しみなく浪費するという暴挙、そしてこの阿房宮こそが、その掠奪の産物というべきものという論法である。

(六)使負棟之柱、多於南畝之農夫、

棟ヲ負フノ柱ヲシテ、南畝ノ農夫ヨリ多ク、

たり楽器を奏でたりして、秦の宮殿に奉仕する身分となった。

明星がきらきらと見えるのは、化粧の鏡が開かれているのである。黒雲がわいているように見えるのは、朝化粧のまげをととのえているのである。渭水の流れに脂のみなぎるのは、化粧の水を棄てたのである。煙が斜めに立ち、霧が立ちこめるのは、香を焚いたのである。雷の音が突然に耳を驚かせるのは、宮中の車が通って行くのである。その車の音ははるかに聞えて来るが、どこへ行ったかわからない。

そして宮女たちは、肌の美しさに、あるいは顔の美しさに、ありとあらゆる媚態を見せ、なまめかしさを見せながら、なよなよと立ち、秋波を送っては、皇帝の寵愛を得たいと思っている。それでも皇帝の在位三十六年中に一度もお目通りできない者もあった。

○ここで亡ぼされた六国の宮廷にいた人々が、みな阿房宮の宮人となったことをしるし、そうした人々の宮殿内での生活の華麗さを述べている。

主に女性たちの生活が比喩でもって描かれている。それは明星・黒雲・霧・雷の音等、自然物を比喩の素材としているが、それが花やかな宮廷内の情景を鮮明にする効果をあげてもいる。

杜牧独自の鋭い直観と描写がうかがわれる。

(五)燕・趙之収藏、韓・魏之經營、
齊・楚之精英、幾世幾年。
取掠其人、倚疊如山。
一旦有不能輸來其間。
鼎鐺、玉石、金塊、
珠礫、棄擲邐迤。

燕・趙ノ収藏、韓・魏ノ經營
齊・楚ノ精英、幾世幾年ゾ。
其ノ人ヨリ取リ掠メ、倚疊スルコト山ノ如シ。
一旦其ノ間ニ輸シ來ル能ハザルモノ有リ。
鼎ハ鐺、玉ハ石、金ハ塊、
珠ハ礫、棄擲シテ邐迤タリ。

らない。

そして、歌台の暖かな楽の響きは、春の光ののどかなのに似ている。一方、舞殿の冷たい舞の袖には、風雨が冷え冷えと吹きかかる。一日のうち、一つの宮殿の中で、このように気候が違う。

○この段も前半は、やはり宮殿の壮麗さを描写しているが、後半「歌台の暖響」以下で、やっと宮殿内の生活が暗示されている。

(四)妃嬪媵嬙、王子皇孫、
辭樓下殿、輦來于秦。
朝歌夜絃、爲秦宮人。
明星熒熒、開粧鏡也。
綠雲擾擾、梳曉鬟也。
渭流漲膩、棄脂水也。
煙斜霧橫、焚椒蘭也。
雷霆乍驚、宮車過也。
轆轆遠聽、杳不知其所之也。
一肌一容、盡態極妍。
縵立遠視、而望幸焉。
有不得見者、三十六年。

(秦・人・鬟・蘭・妍・焉・年以上は通韻)

妃嬪媵嬙、王子皇孫、
樓ヲ辭シ殿ヲ下リ、輦シテ秦ニ來ル。
朝ニ歌ヒ夜ニ絃シ、秦ノ宮人ト爲レリ。
明星ノ熒熒タルハ、粧鏡ヲ開クナリ。
綠雲ノ擾擾タルハ、曉鬟ヲ梳ルナリ。
渭流ノ膩ヲ漲ラスハ、脂水ヲ棄ツルナリ。
煙斜ニ霧橫ハルハ、椒蘭ヲ焚クナリ。
雷霆ノ乍チニ驚クハ、宮車ノ過グルナリ。
轆轆トシテ遠ク聽エ、杳トシテ其ノ之ク所ヲ知ラザルナリ。
一肌一容、態ヲ盡シ妍ヲ極メ、
縵ク立チ遠ク視テ、幸ヲ望ム。
見ユルヲ得ザル者有リ、三十六年。

六国の宮廷にいた女性や、王の子孫たちは、それぞれの宮殿を去り、車で秦にやって来た。そして朝も晩も歌っ

各抱地勢、鉤心鬪角。
盤盤焉。困困焉。
蜂房水渦、矗不知其幾千萬落。

各〻地勢ヲ抱キ、鉤心鬪角ス。
盤盤焉タリ、困困焉タリ。
蜂房水渦、矗トシテ其ノ幾千万落ナルカヲ知ラズ。

（閣・啄・角・落が押韻）

五歩進むごとに楼が一つあり、十歩行くごとに、また建物が一つある。廊下はゆるく線をえがいてめぐり、軒の先は高くつき出している。そしてこれらの建物はそれぞれの地勢によって、中心部の頂上をきそい立たせながら、ぐるぐるとめぐっている。望めば蜂の巣か水面の渦かと見えるばかり、はるかに高くふり仰がれて、幾千万とも知れず、まっすぐそびえ立っている。

○これも賦の筆法の一つであろうか。さまざまな角度からこの宮殿の偉容さを描写している。

㈢長橋臥波、未雲何龍。
複道行空、不霽何虹。
高低冥迷、不知西東。
歌臺暖響、春光融融。
舞殿冷袖、風雨凄凄。
一日之内、一宮之間、
而氣候不齊。

長橋ノ波ニ臥スハ、未ダ雲ニアラザルニ何ノ龍ゾ。
複道ノ空ヲ行クハ、霽レザルニ何ノ虹ゾ。
高低冥迷トシテ、西東ヲ知ラズ。
歌臺ノ暖響ハ、春光融融タリ。
舞殿ノ冷袖ハ、風雨凄凄タリ。
一日ノ内、一宮ノ間ニシテ、
氣候齊シカラズ。

（龍・空・虹・東・融が押韻。凄・齊も押韻）

長い橋が波の上に横たわっているのは、雲もないのに何という龍か。複道が空中に通じているのは雨が晴れたのでもないのに何という虹であろうか。建物はあるいは高くあるいは低く、あたりも暗くなるほどで、西も東もわか

「阿房宮賦」を媒体として、論述してみようと思っている。

二、

論述の資となる「阿房宮賦」を、七段落に区切って、見ることにしよう。

(一)六王畢、四海一。蜀山兀、
阿房出。覆壓三百餘里、
隔離天日。驪山北構而西折、
直走咸陽。二川溶溶、流入宮牆。

六王畢ツテ、四海一ナリ。蜀山兀トシテ、
阿房出ヅ。三百餘里ヲ覆壓シテ、
天日ヲ隔離ス。驪山ヲ北ニ構ヘテ西ニ折レ、
直ニ咸陽ニ走ク。二川溶溶トシテ、流レテ宮牆ニ入ル。

（畢・一・兀・出・日が押韻。陽・牆が押韻）

「賦」は韻文的散文であるので韻をふむ。

戦国の六国が滅ぼされて、秦の始皇帝に統一された。そして蜀の山々は丸坊主になり、阿房宮が出現した。それは三百余里にわたって大地を覆い、太陽をも隠すほどの大きさであった。宮殿は驪山の北に造営され、さらに延びて西に折れ、まっすぐに、咸陽（都）へと向かっている。渭水と涇水の二つの川は、ゆたかに水をたたえて、宮殿へ流れこんで濠垣となっている。

○阿房宮の規模の雄大さを、総体的に述べたもので、それも六国を滅ぼした始皇帝が絶大な権力を象徴することを意図したものであることを想像させる筆致である。

(二)五歩一樓、十歩一閣。
廊腰縵廻、簷牙高啄。

五歩ニ一樓、十歩ニ一閣。
廊腰ハ縵ク廻リ、簷牙ハ高ク啄ム。

前者、「魯霊光殿賦」には、序があって概略次の様なことが記述してある。――㈠、霊光殿を造営した恭王餘という人の紹介、㈡、造営した理由、㈢、宮殿が永く安泰でいられた所以等である。

ここで、その序の全文を引用すると、こうである。

「魯ノ霊光殿ハ、蓋シ景帝程姫ノ子、恭王餘ノ立テル所ナリ。初メ恭王始メテ下国ニ都シ、好ミテ宮室ヲ治ム。遂ニ魯僖ノ基兆ニ因リテ営ム。漢ノ中ゴロ微ニシテ、盗賊奔突スルニ遭ヒ、西京ノ未央建章ノ殿ヨリ、皆隳壊セラル。而シテ霊光巋然トシテ獨リ存セリ。意者豈神明ノ依憑支持シ、以テ漢室ヲ保ツ者ニ非ザルカ。然レドモ其ノ規矩制度、上ハ星宿ニ應ズルハ、亦永ク安ラカナル所以ナリ。

予客タルコト南鄙ヨリシ、藝ヲ魯ニ觀ル。斯ヲ覩テ眙キテ曰ク、嗟乎、詩人ノ興、物ニ感ジテ作ル。故ニ奚斯僖ヲ頌シ、其ノ路寢ヲ歌フ。而シテ功績辞ニ存シ、徳音聲ニ昭ラカナリ。物ハ賦ヲ以テ顕レ、事ハ頌ヲ以テ宣ベラル。賦ニ匪ズ頌ニ匪ザレバ、將ニ何ヲカ述ベン」と。

最後に、「物は賦の形で詠まれることで顕彰され、事は頌（ほめたたえること）に詠われることで広く知られる。賦の技法や頌の体裁をとらない限り、何事も表現することはできないのだ」と、いう。

畢竟するに、賦の意義と効用が付記してあるが、これは漢代の賦系文学の実態を物語る歴然たる証と思われる。後漢の王延寿より、約八百五十年後、晩唐の詩人杜牧に、「阿房宮賦」という作品があるが、これは明快な美文であるが、伝統的な前二者「魯霊光殿賦」と「景福殿賦」の賦の技法とは異質で、阿房宮の壮麗さをほめたたえたものではなくて、この壮大な宮殿をステータスシンボルと思っていた始皇帝を酷評する素材として利用しているものである。

そのうえ為政者の理想的なあり方を論じ、晩唐に対する憂国の真情をも吐露している。

したがって、今回は詩人として著名な杜牧の当時の現実を見据えたうえでの史論というか亡国へのセオリーを

性をとおして、絵画のように眼で楽しむべき文学である。それはおそらく他の文学に比類をみないものであり、象形文字を用いる単音節語にして、はじめて可能な表現方法と思われる。

だがしかし、具体的に漢賦の代表ともいえる司馬相如（紀元前一七九－前一一七年）の『上林の賦』を一見するに、国の内外の物産、草木、禽獣の類を網羅しており、その漢字の形象の羅列が、帝王の心的気象を示すにふさわしいものとされたのであろう。その文学は、本質的には現実の賛歌、権威への従順を示すものであった。さらに、そのレトリックが濃密であればあるほど、思想性は喪失してゆく。それは表現主義の文学ゆえにといえば、それまでであるが、表現が思想をともなわないとき、その精神（志）は失われ、表現は虚構となろう。

『屈原を弔う賦』で有名な賈誼（前二〇一？－前一六九年）の文学に対して、司馬相如の文学は、当時としては、それぞれ必然の産物であったろう。とはいえ、文学のスタイルの選択は、その人の生きざまを暗示するものでもある。

司馬遷（前一四五？－前八六年？）は、『史記』司馬相如列伝第五十七の太史公曰くの中で、次の様に評している。

「相如には、空虚な言辞や濫らな説が多いが、しかし、その要は節倹に帰するのであって、『詩経』の諷諫となんら異なるところはない」と。

この「虚辞濫説」という酷評は、恐らく『上林の賦』のような武帝賛頌の作品を、これまた暗示したものであろう。結局、現実の視覚的対象物への讃歌、権威への従順等を示すものであるのが賦系の文学の一面であることは確かであるが、それにともない宮殿、その他の建造物の壮麗さを讃美した作品も見うけられる。

ちなみに、『文選』（梁の蕭統が選集した詩文集）の賦篇の中にも、「宮殿」という分類があって、そこには後漢の王延寿（王逸の子）の「魯霊光殿賦」と、三国・魏の何晏（紀元一九〇－二四九年）の「景福殿賦」の二篇が収録されている。

キテ」という、要するに理のことばである。いいかえると、神の裁きを求める祝詞を意味する語であったといわれる。それで歌謡の形式では、篇末に〝乱〟や〝少歌〟や〝倡〟などを付記した。――それは情をのべることを主としたものであって、畢竟、叙情が辞系文学の特徴である。

これに対して賦は、外的に事物を描写することを主としたものであって、古くは国頌めなどの歌から出たものとみられている。

ところが、秦の崩壊のあとを承けて漢帝国が誕生すると、辞賦の文学も大きな展開をみせることになる。それは新しい世界に対して、辞と賦とは対立する姿勢をとったのである。

具現すると、神を失った新しい秩序の時代を迎えて、辞は不安と憂愁を表出する文学となり、賦は現実肯定と賛頌の文学となった。

思うに、辞は、本来直接に神に告げ訴える呪誦の文学であって、賦は物に即して、対象にはたらきかける文学であった。――とはいうものの、いずれも、言語のもつ呪的機能に依存するという意味においては、なお古代文学的な性格を保持していた。してみると、漢代における辞賦の展開は、その古代的な原初性を脱して、どのようにしてそれぞれ独自のスタイルを完成してゆくかというところにあったように見うけられる。

ここで辞賦の展開を整理すると、中国の詩文には、字の声義とともに字面を尊重する傾向があるが、なかんずく漢賦の特性は、その視覚的印象を重視するところにあった。漢字のもつ形象の視覚性が、これほど表現の効果を発揮したことは、恐らく従来なかったであろう。

そしてそれは、文学が耳で聴き、呪能的にはたらくものから、読むこと、視ることといった視覚的な文学に比重を移行しつつあることを明示するものでもあった。

つまり、辞系の文学が、耳で聴き、その声調を主とするものであるのに対して、漢賦の世界は、その視覚的形象

り廊下をめぐらし、宮殿の下から廊下づたいに南山にいくことができた。南山の顛には門をたてて、この宮殿のしるしとした。さらに複道（二階建ての長廊下道）をつくって阿房から渭水をわたって咸陽に連絡し、天極（天の紫宮の十七星）が閣道（わたり廊下）づたいに天の川をわたって営室星にいたるのを、かたどったのである。阿房の宮殿は、完成したら、あらためてよい名称をえらんで名づけようとしたのだが、宮殿を阿房（山の中腹）につくったので、天下の人々はこれを阿房宮といったのである。

この時、宮刑に処せられた者、および徒刑者が七十余万人いたが、それを二手に分けて、一方は阿房宮をつくらせ、他方は驪山宮をつくらせた。この工事では、北山の石を堀りだし、蜀（四川省）や荆（湖北省）の地の材木を輸送させた。

よって、関中の宮殿の数は三百にのぼり、関外には四百余の宮殿が存在した。……」と。

ところが、この阿房宮が完成してからいくらもたたぬうちに秦は滅び、都咸陽の陥落とともに、阿房宮も焼けてしまった。――始皇帝が莫大な費用と労力を使って造りながら、そのステータスシンボルも、ほとんど役には立たず、皮肉なことに、彼の暴君ぶりと、亡国を象徴するものとして、後の世まで伝承されることになった。

この阿房宮について、晩唐の詩人杜牧（八〇三年－五八二年）は、漢代の宮廷文学としての伝統を持つ賦系の文学のスタイルと題名を借りて、唯一、「阿房宮の賦」という作品を遺している。

さて、賦系の文学とは、普通、辞賦文学と言われるものであるが、それは先秦文学の継承の上に展開しているものである。具体的には、辞賦とは、「楚辞」と「漢賦」である。つまり、辞賦は一つのジャンルではなくて、辞と賦両者の表現様式の類似から、合わせて辞賦と言われるが、両者にはおのずと区別がある。『文選』や『文心雕竜』では、騒と賦という名を用いている。無論、騒は、「離騒」という作品（『楚辞』離騒篇・屈原の著）のそれである。「辞」はもともと「乱レタ糸ヲ辛（針）デソノ紛紜（みだれたところ）ヲ解ク」意であって、神に対して「辞別

『阿房宮の賦』覚書

A Note on *Abokyu no Fu* (Poem of Abokyu Palace)

松崎治之

Haruyuki MATSUZAKI

一、

阿房宮とは、秦の初代の天子始皇帝（紀元前二五九－前二一〇年）が、天下を統一したのちに築いた宮殿の名であって、今の陝西省長安県の西北、渭水の南に存在した。そしてそれは、南山全体を宮殿に包みこんでしまうほどの壮大なもので、絢爛豪華な建物であったという。

『史記』秦始皇本紀第六の、始皇三十五年（前二一二年）に、阿房宮に関して次のような記載がある。

「始皇は思った。――都咸陽は人口が多くて、先王の宮廷では規模が小さすぎる。聞くところによれば、周の文王は豊に都し、武王は鎬に都して、豊・鎬の間一帯が帝王の都になったとのことだ――。そこで、朝宮（正殿、群臣が参朝する宮殿）を渭水の南の上林苑（御苑の名）のなかに造営した。

そしてまず、前殿を阿房（山の中腹・長安の西北の地）につくったが、その規模は宏大で、東西は五百歩、南北は五十丈あって、殿上には一万人を坐らせることができ、殿下には五丈の旗をたてることができた。周囲にはわた